

バウムガルテン『形而上学』（第四版）

「経験的心理学¹⁾」訳注

—その1—

樋 笠 勝 士
井 奥 陽 子
津 田 栞 里

まえがき

本訳注の試みには二つの目的がある。第一に、美学の領域では良く知られているバウムガルテンの主要著作『美学』の研究に対して、一層の拡充と展開をもたらすためである。既に、松尾大が、初めて『美学』訳注を世に出した際に述べていたように、『美学』は「名のみ有名で、あまり読まれていない書物」であった。とはいえ、その後、『美学』邦訳のおかげで、日本におけるバウムガルテン『美学』の研究が進展し、のみならず、大学の学部教育の中でも、「美学」理解に資する基本文献として、美学研究への契機となってきた。このような状況下で、一般的な美学研究、そしてバウムガルテンの美学研究のために求められるのは、彼の『美学』を支える思想体系全体の理解である。美学研究のためには、どの思想においても、その体系全体が捉えられねばならない。アリストテレスの詩学研究も、カントの美的判断の研究も、各々の思想の哲学的体系の全体から捉えられねばならない。美学は哲学に属している。この立場から、バウムガルテン『美学』の理解のためには、彼の別の主要著作『形而上学』の理解が必須である、と考えるのである。『美学』に先立って、1739年に書かれた『形而上学』では、その論考の中で「美学」という学問が定義されている事実があるが、これ以上に重要なのは、形而上学と美学の一般的な学的連関の問題であろう。もちろん、前者を無視して後者が成り立たないことは言うまでもない。この点に、第二の目

的が関わっている。西洋哲学史の一般的見解では、大陸合理論の独断的形而上学から、カント批判哲学への大きな転換点は、通常、ヒュームなどのイギリス経験論の議論に求められている。この見解に何の問題がないとしても、しかし、カント以前のドイツ哲学の状況、ライプニッツ以後の大陸の形而上学の動向などは、簡単に触れられるのみであり、看過されていると言っても過言ではない。昨今、この狭間の時期を研究する文献学的研究が現れてはいるが、しかし、まだまだ途上であり、未発掘の文献があまりに多く、評価以前の研究状況である。バウムガルテン『形而上学』の訳注は、かかる哲学史の狭間を埋める役割も担っている。そこに、バウムガルテン以後のカントとの繋がりを、またバウムガルテン以前のライプニッツ・ヴォルフ、或いはそれ以前との繋がりを見いだすといった研究がこれから必要とされるのである。

本訳注は、「バウムガルテン読書会」によって遂行された。これは、上智大学文学部哲学科生の津田栞里の提案により発足した会である。初回は、2015年2月6日（於 慶應義塾大学）に開かれ、ほぼ週一回のペースで、G. GawlickとL. Kreimendahlによる独訳、C. D. FugateとJ. Hymersによる英訳、G. F. Meierによる独訳を参照しつつ²⁾、またバウムガルテンの他の著作等も参照しながら、『形而上学』ラテン語原典（オルムス社第七版）を訳出する会合を重ねた。主要な参加者は、総合的な監修及びラテン語監訳を担当する樋笠勝士（慶應義塾大学言語文化研究所）、井奥陽子（東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程）、和田史比呂（慶應義塾大学大学院文学研究科博士前期課程）、氏原健太（筑波大学人文・文化学群人文学類）、征矢法子（慶應義塾大学文学部人文社会学科）、岩切啓人（東京藝術大学美術学部芸術学科）、鈴木伽奈（上智大学文学部哲学科）等である。さらに2015年夏からは、バウムガルテン哲学研究者、増山浩人（日本学術振興会特別研究員PD）が、アドバイザーとして適宜参加し、専門研究の立場から意見を述べた。

本訳注においては、檜垣良成『カント理論哲学形成の研究—「実在性」概念を中心として』（溪水社、1998年）の巻末に、既に『形而上学』の「存在論」部分訳があること、そして、当面は美学研究に資することを優先することから、冒頭から訳出することは避け、「経験的心理学（*psychologia empirica*）」から訳出することとした。美学は、バウムガルテンにとって感性学である以上、認識論を構成する「心理学

(psychologia)」を読む学的利益が大きいからである。

凡例

1. テキストは第四版を用いた。オルムス社からリプリント出版されている第七版が流通しているが、全七版中、第四版まではバウムガルテン自身による改訂があり、またそれ以降の版は訂正がかなり少なく、出版社など他者による訂正の可能性が高いと見込まれることから、第四版が内容的には決定版に近いと考えた。また、第四版を底本とする研究が多いのは、カントが第四版を用い、アカデミー版カント全集でも第四版が収録されているためであろう。そこで、本訳注では、第四版を訳注の底本とし、適宜、他の版本、独訳（第四版に基づく）、英訳（第四版に基づく）、『美学』邦訳、小田部胤久「バウムガルテン『形而上学』（第504-623節）原典批判」（神戸大学『紀要』17号、1990年）を参照した。
2. 『形而上学』では、他の著作と同様に、先立つ箇所すでに規定した箇所を参照する指示として、項番号（§で表示）が原文に記載されている。本訳注ではこれを踏襲し、原文にはない丸括弧で表記した上で、注にて説明した。なお、本訳注は『形而上学』の四部構成（存在論、宇宙論、心理学、自然神学）のうちの第三部の部分に当たるため、必然的に、参照箇所の指示は第一部の「存在論」か「宇宙論」、同じ第三部の部分ということになる。
3. 原文における注は、バウムガルテン（或いは出版社）がラテン語原文に対してドイツ語訳を付したものである。これについては本文に原典の表記のまま記載し、必要に応じて訳出した。訳注はアラビア数字で後注とした。必要に応じて、バウムガルテンの他の著作を参照する訳注については、著作を以下の様に略記した。例えば、AE §. 120 とあれば『美学』の §. 120 を指す。
4. 本訳注に関連するバウムガルテンの書誌情報は下記の通りである（訳注の中で、それぞれ MP, MT, AE, AL と略記）。

* Baumgarten, Alexander Gottlieb. 1735. [MP] : "Meditationes philosophicae de nonnullis ad poema pertinentibus." Halle. In *Reflections on Poetry : Alexander Gottlieb Baumgarten's Meditationes philosophicae de nonnullis ad poema pertinentibus*,

translated by Karl Aschenbrenner and William Benjamin Holther. University of California Press, 1954.

- * —. 1757 (1739) . [MT] : *Metaphysica*. editio 4. Halle: Hemmerde. <<http://digitale.bibliothek.uni-halle.de/id/5202099>> (『形而上学』第四版)
 - * —. 1950/1758. [AE] : *Aesthetica*. Frankfurt an der Oder: Kleyb. Reprint, Hildesheim: Olms, 1986. (『美学』松尾大訳、玉川大学出版、1987年)
 - * —. 1773 (1761) . [AL] : *Acroasis logica*. editio 2. Halle: Hemmerde. <<http://reader.digitale-sammlungen.de/resolve/display/bsb10042700.html>> (『論理学講義』第二版)
5. 原文におけるスモール・キャピタルは《 》で表記し、イタリックについては〈 〉で括った。また原文での丸括弧は、そのまま丸括弧とした。翻訳上、補足や説明のために補訳する箇所は〔 〕で表記した。
6. 本訳注では文脈に応じて同じ術語でも訳し分けを行い、必要に応じてラテン語原語を〔 〕にて表記した。その他必要な説明は訳注をつけた。

注

- 1) *psychologia* は、『形而上学』の下位区分として、「存在論」と「宇宙論」の後におかれた独立の部門である。バウムガルテンは、アリストテレスの『形而上学』を形而上学の規範的思考様式とするスコラ哲学の影響が残る近代哲学に位置するということもあり、また内容的にも認識論が占めるため、*psychologia* という語は、本来は「魂論」と訳すべきである。しかし、先行する翻訳の成果を考慮し、また下位認識能力論としての経験的実証性を強調するために「心理学」という訳を採用する。本訳注2を参照。なお、以下も参照、檜垣良成「バウムガルテンの欲求能力論—カント哲学のコンテクストとしての—」(筑波大学哲学・思想学系『哲学・思想論集』29号、2010年)。
- 2) 翻訳に際して以下を参照した。
- * Baumgarten, Alexander Gottlieb. 2013. *Metaphysics : A Critical Translation with Kant's Elucidations, Selected Notes, and Related Materials*. Translated and edited with an introduction by Courtney D.

- Fugate and John Hymers, London and New York : Bloomsbury,
- * ——. 2011. *Metaphysica / Metaphysik*. Übersetzt, eingeleitet und herausgegeben von Günter Gawlick und Lothar Kreimendahl. Stuttgart : Frommann-Holzboog.
 - * ——. [1783] 2004. *Metaphysik : Ins Deutsche übersetzt von Georg Friedrich Meier*. Mit einer Einführung, einer Konkordanz und einer Bibliographie der Werke A.G. Baumgartens von Dagmar Mirbach. Jena : Scheglmann.

第二部 心理学

プロレゴメナ¹⁾

§. 501

《心理学》は、魂についての非常に一般的な述語に関する学である。

§. 502

心理学は、諸神学〔=自然神学と啓示神学〕、美学、論理学、実践諸学の第一原理を含むので、それは正当に（§. 501）形而上学（§. 1）に算入される（§. 2）。

§. 503

《心理学》は、その言明を（1）より身近な経験から導き出す《経験的心理学》であるか、（2）魂の概念からより長い一連の諸推論によって導き出す《合理的心理学》である²⁾。

第一章 経験的心理学

第一節 魂の現実存在〔existentia〕

§. 504

もし存在者のなかに或るものを知ることでできるものが存在すれば、それは《魂〔anima〕》^aである。私のなかに或るものを知ることでできるもの（§. 57）が現実存在する（§. 55）。したがって、私のなかに魂は現実存在する（私は魂として現実存在する）。

^a eine Seele.

§. 505

私は思考する、〔すると〕私の魂は変化する（§. 125, 504）。したがって、諸思考は私の魂の偶有性である（§. 210）。それらの諸思考のうち

の少なくとも或るものは、私の魂のうちに十分な根拠をもつ (§. 31)。したがって、私の魂は力である (§. 197)³⁾。

§. 506

諸思考は諸表象である。したがって、私の魂は表象する力である (§. 505)⁴⁾。

§. 507

私の魂は、この宇宙 [= 現実世界] の少なくとも或る諸部分について思考している (§. 354)。したがって、私の魂は、少なくとも部分的にであれ、この宇宙を表象する力である (§. 155)。

§. 508

私はこの宇宙に属する或る物体と、その変化について思考する。或るものについてはより少ない変化を、別の或るものについてはより多くの変化を、また、或る一つのものについては最も多くの変化を思考する。そして、まさに最後のものが私の部分であり (§. 155)、それゆえ、《私の身体 [= 物体]》^{a 5)} である。私はそれについて、他のいかなる物体の変化よりもより多くの変化を思考する。

^a mein Leib.

§. 509

私の身体は、この世界において、規定された位置 (§. 85) を、[すなわち、] 場所、時期 (§. 281)、状況 (§. 284) をもつ。

§. 510 ⁶⁾

私は、或るものを判明に思考し、また或るものを渾然と思考する。或るものを渾然と思考している者は、その諸徴標を区別しないが、それにもかかわらず表象ないし知覚している。というのも、もしその者が、渾然と表象されたものもつ諸徴標を区別したならば、渾然と表象したものを判明に思考したであろうからである。また、もしその者が、渾然と思考されたものもつ諸徴標を全く知覚しなかったならば、渾然と知覚されたものをその諸徴標によって他のものから区別することができな

かったであろうからである。したがって、或るものを渾然と思考している者は、或るものを不明に表象している。

§. 511

魂のなかには不明な諸知覚が存在する (§. 510)。この不明な諸知覚の総体は《魂の根底》^{a7)} と呼ばれる。

^a der Grund der Seele.

§. 512

なぜ私が或るものをより不明に、また他の或るものをより明瞭に、また別の或るものをより判明に知覚するのかということが、この宇宙における私の身体の位置から認識されうる (§. 306, 509)。すなわち、この宇宙における私の《身体の位置に応じて私は表象する》^{a8)}。

^a meine Vorstellungen richten sich nach der Stelle meines Leibes.

§. 513

私の魂は、私の身体の位置に応じて (§. 512)、宇宙を (§. 507) 表象する (§. 506) 力 (§. 505) である。

§. 514

魂における諸表象の全体は《全体的知覚》^a であり、その諸部分は《部分的知覚》^b である。そして、不明な諸表象の総体は《不明性の領野》^c (闇の領野) であり、それは魂の根底 (§. 511) である。また、明瞭な諸表象の総体は《明瞭性の領野》^d (光の領野) であり、それは《渾然性の領野》、《判明性の領野》^e、《十全性の領野》⁹⁾ 等を包括する。

^a die gantze Vorstellung. ^b iener Theile. ^c das Feld der Dunckelheit. ^d das Feld des Lichtes. ^e die Felder der Verwirrung; der Deutlichkeit, u.s.w.

§. 515

真なる認識は実在性である (§. 12, 36)¹⁰⁾。真なる認識の反対は否定性である (§. 81, 36)。それは、認識のないことないし認識の不足つまり《無知》^a と、仮象の認識つまり《誤謬》^b である。最小の認識とは、

ある一つの最も小さなものについての、最も小さく真なる認識である (§. 161)。したがって、最も多くかつ最も大きなものについての最も真なる認識が最も多大であるかぎり、認識はより多くかつより大きなものについてのより真なる認識であるほど、いっそう多大である (§. 160)¹¹⁾。より多くのものを認識する程度は、《認識の豊かさ》^c (豊富、広さ、富裕、廣大) である。より少ないものを認識する程度は、《認識の狭さ》^d である。より大きなものを認識する程度は《認識の尊厳》^e (高貴、偉大、莊重、威厳) である。より小さなものを認識する程度は《認識の卑小》^f (薄弱、輕薄) である。認識がより大きな秩序¹²⁾ においてより真なるものどもを結びつけるほど、認識はいっそう真であり (§. 184)、それゆえいっそう優れている¹³⁾。より真なるものどもを提示する認識は《正確な認識》^g (研磨された認識) である。より真でないものどもを示す認識は《粗雑な認識》^h である。認識におけるより大きな秩序ないし《方法》は、《認識についての方法的なもの》(学説的な方法、学科的な方法) であり、より小さな秩序は、《認識についての混雜したもの》ⁱ である。私の魂のなかにある認識とその諸表象は、あるいはより小さく、あるいはより大きい (§. 214)。そして、私の魂のなかにある認識とその諸表象が根拠であり、すなわち《広義の論証》であるかぎり、その認識とその諸表象に力と効力が帰せられる (§. 197)。不毛な認識というものは一切ない (§. 23) が、それでもより大きな効力つまり《強力さ》をもつ認識は《より強い認識》^j であり、より小さな効力つまり《虚弱さ》をもつ認識は《より弱い》^k (無力な、活気のない) 認識である。より弱い諸表象が生じると魂の状態をより小さく変化させ、より強い諸表象が生じると魂の状態をより大きく変化させる (§. 208, 214)。

a Vnwissenheit, b Irrthum, c Weite, Verbreitung, Ausdehnung, Vorrath, Reichthum der Erkenntniss, d enge Einschränkung, Armuth, Dürftigkeit der Erkenntniss, e Grösse, Werth, Würde, Wichtigkeit, f Geringschätzigkeit, g genau, h grob, i ein Gemenge, j stärker, k schwächer.

§. 516

或る部分的諸知覚をともなう諸知覚は、その同一の全体の諸部分として、《連合した諸知覚》^a と呼ばれる。連合した諸知覚の中で最も強い知覚は《支配する》^b (魂において統治する)。

^a vergesellschaftete Vorstellungen, ^b die herrschende.

§. 517

知覚は、より多くの諸徴標を含むほどより強い (§. 23, 515)。それゆえ、明瞭な知覚よりも多くの諸徴標を含むような不明な知覚は、その明瞭な知覚よりもいっそう強く、判明な知覚よりも多くの諸徴標を含むような渾然とした知覚は、その判明な知覚よりもいっそう強い。自らのうちにより多くの諸徴標を含むような諸知覚は《含蓄ある諸知覚》^aと呼ばれる。したがって、含蓄ある諸知覚はより強い。それゆえ、諸観念¹⁴⁾は大きな強力さをもつ (§. 148)。含蓄ある意味をもった諸々の語は、《強調された語》^b (強調) である。強調された語についての学は《強意学》である。固有名のもつ力は小さくない¹⁵⁾。

^a vielsagende Vorstellungen, ^b ein Nachdruck.

§. 518

魂の状態は、それを統治する諸知覚が不明であるならば《闇の王国》^aであり、それを支配する諸知覚が明瞭であるならば《光の王国》^bである。

^a das Reich der Finsterniss, ^b das Reich des Lichtes in der Seele.

第二節 下位認識能力

§. 519

私の魂は或るものを認識する (§. 506)。したがって、私の魂は《認識能力》^aを、すなわち、或るものを認識する能力 (広義の知性、第 402 項と比較せよ¹⁶⁾) をもっている (§. 57, 216)。

^a Vermögen zu erkennen.

§. 520

私の魂は或るものを不明に認識し、また或るものを渾然と認識する (§. 510)。さて、他の条件が等しいならば、私の魂が事物を知覚しつつ、その事物を他の諸事物から異なったものとして知覚する場合、事物を知覚しつつも〔その事物を他の諸事物から〕区別しない場合よりも、私の

魂はその事物を多く知覚している (§. 67)。したがって、他の条件が等しいならば、明瞭な認識は不明な認識よりもいっそう優れている¹⁷⁾ (§. 515)。それゆえ、不明性はより劣った程度の認識であり、明瞭性はより優れた程度の認識である (§. 160, 246)。そして同様の理由から、渾然性はより劣った程度の認識、すなわちより下位の程度の認識であり、判明性はより優れた程度の認識、すなわち上位の程度の認識である。このため、或るものを不明かつ渾然とした仕方で、すなわち判明でない仕方で認識する能力は、《下位認識能力》^a である。したがって、私の魂は下位認識能力をもっている (§. 57, 216)。

^a das untere Vermögen zu erkennen.

§. 521

判明でない表象は《感性的表象》^a と呼ばれる。したがって、私の魂の力は、感性的な知覚内容を下位能力によって表象する (§. 520, 513)。
^a eine sinnliche Vorstellung.

§. 522

私は或るものを、その特徴のうちのいくつかが明瞭であるように自身に表象し¹⁸⁾、また幾つかが不明であるように自身に表象する。このような知覚は、諸徴標が明瞭である場合に判明であり、諸徴標が不明である場合に感性的である (§. 521)。それゆえ、何か渾然性と不明性とが混ぜ合わされた判明な知覚もあり、また何か或る判明なものをうちに含む感性的な知覚もある。後者は、より下位の部分については、下位認識能力によって形づくられる (§. 520)。

§. 523

表象のもつ諸徴標は、媒介的であるか無媒介的であるかのいずれかである (§. 67, 27)。或る知覚において明瞭性を判定する際に考慮されるのは、後者のみである。

§. 524

知覚のもつ諸徴標は、十分であるか不十分であるか (§. 21, 67)、また、絶対的に必要であるか (§. 106, 107)、それ自体では偶有的である

か (§. 108)、また、絶対的に不変的で恒常的であるか (§. 132)、それ自体では変動的で可變的であるか (§. 133)、どちらかである。しばしば以上のうち前者を取り上げて、優れた意味で、たんに徴標と呼ぶ。

§. 525

表象のもつ諸徴標は、否定的であるか実在的であるかのいずれかである (§. 135)。前者の徴標をもつ知覚は《否定的知覚》^aと呼ばれ、後者の徴標をもつ知覚は《肯定的知覚》^bと呼ばれる。否定的な知覚内容は、あるいは《全体的に否定的な知覚内容》^cである。それは、その知覚内容がもつ個々の徴標が〔すべて〕否定的であり、その諸徴標から何も知覚されない場合である (§. 136)。また、否定的な知覚内容は、あるいは《部分的に否定的な知覚内容》^dである。それは、その知覚内容がもつうちのいくつかの徴標が否定的である場合であるが、その徴標は真に否定的であるか仮象的に否定的かである (§. 12)。

^a verneinende. ^b bejahende. ^c völlig verneinende. ^d zum Theil verneinende Vorstellungen.

§. 526

諸徴標のうちのいくつかは、他の諸徴標よりもいっそう実り豊かで、いっそう莊重である (§. 166)。十分な諸徴標は、不十分な諸徴標よりもいっそう実り豊かで、いっそう莊重である (§. 169, 524)。

§. 527

《容易》^aとは、何かを実現するために小さな力が必要である場合であり、何かを実現するためにより大きな力が要求される場合は、《困難》^bである。それゆえ《或る特定の主体にとって容易》^cとは、何かを実現するために、その人がもつ力のうちのほんの一部しか必要でない場合である。また《或る特定の主体にとって困難》^dとは、何かを実現するために、その実体[*substantia*]¹⁹⁾がもつ力のうちの大部分が要求される場合である。したがって、容易さと困難さには程度が認められる (§. 246)。

^a leicht. ^b schwer. ^c diesem oder jenem leicht. ^d diesem oder jenem schwer.

§. 528

知覚が最小限に明瞭であるとは、一つの最も異なるものから知覚を最も困難な仕方では区別するために、その知覚のもつ諸徴標だけで十分である場合である (§. 161)²⁰⁾。したがって、より多くのものどもから、また、より近似しているものどもから、より容易に私が知覚を区別することができるほど、その知覚は私にとっていっそう明瞭である (§. 160)。知覚が私にとって最も明瞭であるのは、あらゆるものどもから、また最も近似しているものどもからでさえ、最も容易に私が知覚を区別できる限りである (§. 161)。表象が最小限に不明であるとは、ただ一つの最も近似しているものどもから表象を最も容易に区別するために、その表象のもつ諸徴標が十分でない場合である (§. 161)²¹⁾。したがって、より多くのものどもから、また、より異なるものどもから、より大きな力が行使されたとしても、それでも知覚が区別されえないほど、その知覚のもつ不明性は私にとっていっそう大きい。知覚が私にとって最も不明であるのは、いかなるものどもから、また最も異なるものどもからでさえ、私のすべての力が行使されたとしても、知覚が区別されえない限りである (§. 161)。

§. 529

私が他のものどもよりもより明瞭に知覚するものに、《私は注意している》^a。また、他のものどもよりもより不明に知覚するものから、《私はそのものから注意をそらしている》^b。したがって、私は注意する能力と、注意をそらす能力をもつが (§. 216)、これらは限界ある能力である (§. 354)。それゆえ、この限界ある諸能力を、私はただ或る特定の程度においてもつにすぎず、両者をともに最大の程度においてもつことはない (§. 248)。限界ある量がより多く減らされるほど、残された量は少なくなる。したがって、或る一つの事物に私がより注意するほど、他のものどもによりいっそう注意することができなくなる。したがって、非常に注意を引くようなより強い知覚は、より弱い知覚を不明にするか、より弱い知覚から注意をそらすようにさせる (§. 528, 515) (§. 528, 515)。

^a daran gedenke ich, darauf habe oder gebe ich acht.

[私はそのものを思う、私はそのものに注意している、または注意をむ

ける。]

^b das lasse ich aus der Acht, das werfe ich in Gedanken weg, das verdunkle ich mir, das entziehe ich meinen Gedanken.

[私はそのものから注意をそらす、私はそのものを思考のなかで棄却する、私はそのものを不明にする、私はそのものを思考から取り去る。]

§. 530

知覚は、私が最大限に注意している諸徴標に加え、他のより明瞭でない諸徴標をも含むならば、それは《複合された知覚》^aである。《複合された思考》のもつ諸徴標のうちで、私が最大限に注意している諸徴標の総体は《主要知覚》^bと呼ばれ、より明瞭でない諸徴標の総体は《不随知覚（副次的知覚）》^cと呼ばれる。それゆえ、複合された知覚は主要知覚と不随知覚の全体である（§. 155）。

^a eine gehäufte. ^b die Haupt- ^c Neben-Vorstellung.

§. 531

二つの明瞭な思考が〔それぞれともに〕三つの徴標をもち、だが一方の思考における諸徴標は明瞭で、他方の思考における諸徴標は不明であると措定せよ。前者の思考の方が、より明瞭であろう（§. 528）。したがって知覚の明瞭性は、諸徴標がもつ明瞭性によって、〔つまり〕判明性や十全性などにしたがって増大させられる。二つの明瞭な思考が同等に明瞭な徴標をもち、一方の思考においては三つの徴標が含まれ、他方の思考においては六つの徴標が含まれると措定せよ。後者の思考の方が、より明瞭であろう（§. 528）。したがって明瞭性は、諸徴標の量の多さによって増大させられる（§. 162）。諸徴標の明瞭性によってより大きな明瞭性は《内包的により大きな明瞭性》^aといわれ、諸徴標の量の多さによってより大きな明瞭性は《外延的により大きな明瞭性》^bといわれうる。外延的により明瞭な知覚は《生動的な知覚》^cである。思考と言説がもつ生動性は《思考と言説の光輝》^d（輝き）であり、その反対は《思考と言説の無味乾燥さ》^e（難解な種類の思考と発言）である。いずれの明瞭性も《明白性》^fである。それゆえ明白性は、生動的であるか²²⁾、知性的であるか、あるいは両方である。他の知覚の真理を認識する際に現れるような力をもつ知覚とその力は、《立証する知覚と力》^gである²³⁾。

他の知覚を明瞭にする力をもつ知覚とその力は、《説明する知覚と力》^h（明らかにする知覚と力）である。他の知覚を生動的にする力をもつ知覚とその力は、《描き出す知覚と力》ⁱ（彩る知覚と力）である。他の知覚を判明にする〔力をもつ〕知覚とその力は、《解明する知覚と力》^j（開示する知覚と力）である。真理について明確に知ることは《確実性》^k（主観的な観点での確実性。§. 93を参照せよ²⁴⁾）である。感性的確実性は《得心》^lであり、知性的確実性は《確信》^mである。〔或る〕事物とその事物の真理とを思考している者は、他の条件が等しいならば、事物のみを思考している者よりも多く思考している。それゆえ確実な思考と認識は、他の条件が等しいならば、確実でないといわれる《不確実な思考と認識》ⁿよりも優れている（§. 515）。当然与えられるべき確実性よりも不確実な認識は、《表面的な認識》^oである。要求された程度に応じた確実な認識は、《確固とした認識》^pである。認識はより明瞭で、より生動的で、より判明で、より確実であるほど、いっそう優れている。他の知覚の確実性を結果としてもつ知覚とその力は、《得心させる知覚と力》^qであるか、あるいは《確信させる知覚と力》^rである。確実な明白性は《明証性》^sである。

a ein schärferes, strengeres. b ein verbreiteteres Licht. c eine lebhaftere Vorstellung. d das schimmernde der Erkenntnis und Rede. e das trockne. f die Fasslichkeit, Verständlichkeit. g die beweist, wahrmacht. h die entdeckt, anzeigt, woraus erhellt. i die erläutert, aufhellt. j die aufschliesst, auseinander setzt entwickelt. k Gewissheit. l Veberredung. m Veberzeugung, Veberführung. n ungewisse Erkenntnis und Gedanken. o seichte, unsichre. p sichere, gründliche Kenntniss. q von überredender. r von überzeugender Kraft und Wirksamkeit. s das völlig ausgemachte.

§. 532

内包的により明瞭な知覚は、外延的により明瞭な知覚と同様に感性的でありえ（§. 522, 531）、そのときにより生動的な知覚は、より生動的でない知覚よりも完全である（§. 531, 185）。より生動的な知覚は、内包的により明瞭な知覚よりも、つまり判明な知覚そのものよりも、力強いことがありうる（§. 517, 531）。

§.533

感性的に認識することと叙述すること〔＝感性的認識と感性的叙述〕
についての学は美学（下位認識能力の論理学、カリス²⁵）とムーサの哲
学、下位認識論、美しく思考する技術、理性に類比的なものについての
技術)^aである。

^a die Wissenschaft des Schönen. [美しいものについての学]

訳注

- 1) 「プロレゴメナ (prolegomena)」とは「序言」のことである。バウムガルテンは、体系的な論述を心がけており、およそ著作或いは各部門の冒頭において、例えば §. 501-503 のように、当該の学問を定義し、その全体像について総合的な規定を行うことが多い。
- 2) バウムガルテンはヴォルフに倣って、心理学を経験的心理学と合理的心理学とに区分する。ヴォルフによれば、経験的心理学は観察によってア・ポストエリオリに、合理的心理学は魂についての概念からア・プリオリに、人間の魂についての原理を導き出す (『哲学一般についての予備的序説』 §. 111-112; 『経験的心理学』 §. 1)。両部門は独立しているのではなく、「経験的心理学は合理的心理学に諸原理を与える」 (『経験的心理学』 §. 4)。つまり、経験的心理学において確立された命題が、合理的心理学の論証で用いられる。両部門のこうした関係には、「理性と経験の結婚 (connubium rationis et experientiae)」 (『経験的心理学』 §. 349) というヴォルフ哲学の基本理念が表れている。
- 3) 「力 (vis)」の概念については、先行する存在論においてすでに規定されている (§. 197 参照)。
- 4) §. 505 では、思考が魂を根拠とした偶有性であることから、魂は力であると結論された。§. 506 ではさらに、思考が表象であることから、魂は表象する力であると規定される。このように、バウムガルテンは経験的心理学において cogito を出発点としつつ、魂を説明するための概念には表象を用いる。なお「表象」とは、あらゆる個々のモナドが行う、宇宙を映し出す作用を意味する (§. 400)。モナドには、物体の要素 (§. 421) や、動物の魂 (§. 793) と人間の魂 (§. 745)、および神 (§. 838) が含まれる。『論理学講義』では「或るものを表象すること (sibi aliquid repraesentare) とは、そのものを《知覚すること (percipere)》である」 (AL §. 1) と定義されるように、表象は基本的に知覚と互換可能な概念である (たとえば MT §. 528 の用法を参照)。また、「思考 (cogitatio)」は『論理学講義』では「統覚された知覚 (perceptio appercepta)」と定義される (§. 3)。統覚とは、存在者が或るものを「識別すること (distinguere)」であり、或るものを「知ること (conscium esse)」とも言われる (ibid.)。「思考しているときの表象ないし知覚」は「広義の認識 (cognitio)」と呼ばれ、「思考しているときの表象ないし知覚の総体」が「狭義の認識」と呼ばれる (AL §. 4)。なお、この統覚に関連する語群 (apperceptio, apperceptio, apperceptibilitas) の用例は、存在論 (§. 93) や心理学 (§. 549, 628, 652) で確認される。バウムガルテンが、表象を認識対象とする認識 (意識的表象) の問題に触れている可能性に

については、以下を参照。山内志朗「ライプニッツの影響 *apperceptio* をめぐって」『講座 ドイツ観念論 第一巻ドイツ観念論前史』弘文堂、1990年。

- 5) 「《私の身体 [= 物体]》」という箇所は、第一版では通常の小文字表記だが、第二版以降はスモールキャピタル表記にされる。§. 512の「《身体の位置に応じて、私は表象する》」という箇所も同様である。版の改定により、表象作用における身体の重要性がいっそう強調されていることが分かる。
- 6) バウムガルテンは認識を明瞭性の程度に応じて、次のように分類する (AL §. 14, 30; MT §. 520-522)。対象 (*obiectum*) ないし事物 (*res*) がそれとして識別されている場合、その認識は「明瞭な (*clara*) 認識」と呼ばれ、識別されていない場合は「不明な (*obscura*) 認識」とされる。明瞭な認識はさらに、事物のもつ徴標 (*nota, character*) ないし特徴 (*varia*) が識別されている場合は「判明な (*distincta*) 認識」と呼ばれ、徴標ないし特徴が識別されていない場合は「渾然とした (*confusa*) 認識」とされる。ただし、これらの認識の境界は明確ではなく、むしろ連続的である (AE §. 7)。判明な認識は「知性的 (*intellectualis*) 認識」ないし「哲学的認識」とも言われ、「非判明な (*indistincta*) 認識」、すなわち渾然とした認識と不明な認識は「感性的 (*sensitiva*) 認識」とも言われる。判明な認識は上位認識能力によって、非判明な認識は下位認識能力によって得られる (MT §. 521, 624)。判明な認識は論理学の対象であり (AL §. 41)、渾然とした認識は美学の対象である (AE §. 1)。各認識の事例について、バウムガルテンによる記述はない。ヴォルフによれば、明瞭な認識とは、たとえば、昼の光のなかで木を直観するときや、石に触れて熱を知覚するときの認識であり、不明な認識とは、対象が遠くにあって認知 (*agnoscere*) しえない場合の認識である (『経験的心理学』§. 31-32 *Scholium*)。ライプニッツによれば、不明な認識とは、かつて見た花や動物を、それに似た他のものから識別して再認 (*recognoscere*) しえない場合や、或る概念について確実な定義を持たずに考察する場合の認識などである。また判明な認識とは、たとえば貨幣検査官による金の真贋の判別である。渾然とした認識は、色や香りや味などの感官の対象についての認識や、芸術作品のよしあしの判断などである (「認識、真理、観念についての省察」『ライプニッツ著作集8：前期哲学』工作舎、1990年を参照)。なお、判明性の下位分類については §. 514の訳注9) を参照せよ。
- 7) 「魂の根底」は、スコラ哲学末期のドイツ神秘主義思想 (エックハルトやタウラーなど) によって、神や神性の座す場として *grunt der sêle*, *Seelengrund* と呼ばれた概念を淵源とするものである。神の創造による

すべてが備わるとされる「根底」は、ライブニッツにおいては、必然的真理のある場であり、神の生得観念や無数の微小観念を含め魂に生じるすべての観念の根源でもある。バウムガルテンは、これを「不明な表象の総体 (§. 511)」とする。彼は、下位認識能力論において、ライブニッツによって意識されないとされた「無数の微小観念」の概念を、気づかれない「不明な表象の総体」の概念に適用する。表象が不明であるがゆえに「闇 (§. 514, 518)」と描写されるが、その領野をヴォルフが「表象の欠陥」とみなしたのと違って、バウムガルテンは、徴標の多さの数量的価値をもつ「外延的明晰性 (§. 531, 532)」のゆえに、「より生動的な知覚 (§. 532)」を生みだす場として肯定的にとらえている。参照、小田部胤久「魂とその根底：ライブニッツからシェリングまでの美学的言説の系譜学の試み」(東京大学大学院人文社会系研究科・文学部美学芸術学研究室『美学芸術学研究』29号、2011年)。

- 8) §. 508の訳注5)を参照せよ。
- 9) 十全性は判明性の下位分類である。バウムガルテンは『論理学講義』のなかで、認識の明瞭性の程度を概念 (conceptus) へ適用した後、「諸概念においては判明性の程度が与えられる」と述べ、判明性の程度を「徴標の量の多さ」と「徴標のよさ (bonitas)」および「徴標の明瞭性」におおじて分類する (AL §. 110)。徴標の明瞭性にかんしては、判明な概念のもつ徴標が判明であれば、その概念は「十全な (adaequatus) 概念」と呼ばれ、渾然としていれば「不十全 (inadaequatus) な概念」と呼ばれる (AL §. 108)。十全な概念はさらに、その徴標が十全であれば「深淵な (profundus) 概念」と呼ばれる (AL §. 109)。徴標の量とよさにかんしては、§. 107と §. 54の参照指示がなされる。§. 107では、判明な概念のもつ徴標が、その対象をあらゆるものから識別するために十分であれば、その概念は「充満な (completus) 概念」であり、不十分であれば「非充満な (incompletus) 概念」であると定義される。§. 54では、「外的な徴標」と「内的な徴標」といった分類について説明されるが、そうした徴標をもつ判明な概念が別の名称で呼ばれることはない。
- 10) §. 12では、「真の矛盾」と「仮像の矛盾」について、前者は矛盾があらうように見えるのみならず、実際矛盾がある場合として、後者はたんに矛盾があるように見える場合として規定される。§. 36では、実在性とは真に「積極的 (positiva) で肯定的 (affirmativa) な規定」であり、否定性とは真に「否定的な規定」であると定義される。§. 515ではこれらを踏まえて、「真なる」が真に積極的で肯定的な規定であるから、真なる認識は実在性であると説明される。
- 11) 「多い (multus)」や「真の (verus)」と並置される場合の maior と

maximusは「より大きい」「最も大きい」とし、それらの性質の増大にともなう認識全体の性質については「より多大である」「最も多大である」と訳し分けた。また §. 520のように価値を含意する場合、magnusは「優れた」、parvusは「劣った」と訳した。

- 12) 「秩序」は §. 78-88にて定義されている。多様の統一という概念や、広義の音楽 (musica latius dicta) への言及による一般的な規定から、秩序の概念は伝統的なものである。参照指示の §. 184は、存在論における、真理 (「形而上的真」) と秩序との対応への言及である。認識論における秩序は、認識を種別化する真の度合いに対応した認識のあり方を表している。
- 13) この maior は、ordo という観点が導入されたことで、学問的認識の水準が問われているから「優れている」と訳す。
- 14) 観念 (idea) とは「個別概念 (conceptus singularis)」、すなわち個別的な存在者 (ens singulare) ないし個体 (individuum) についての概念である (AL §. 51)。観念と区別される「共通 (communis) 概念」、すなわち普遍的な存在者 (ens uniuersale) についての抽象をとおした概念は、「狭義の〔一般〕概念 (notio)」と呼ばれる (AL §. 51, 68)。なお「広義の〔一般〕概念」は概念と同義であり、観念も含む (AL §. 7)。概念の定義は「認識対象ないし或る一つのものについての認識」である (AL §. 7)。
- 15) 固有名 (nomina propria) とは、「個体を表示する名前」(『詩にかんするいくつかの哲学的省察』 §. 89) あるいは「観念や個別概念や個体についての記号」(AE §. 797) である。個体は「汎通的に (omnimode) 規定されている」(MT §. 148; MP §. 19)。したがって、徴標が多いほど知覚が強くなると考えるバウムガルテンにとって、固有名は非常に大きな力をもつ。そのためバウムガルテンはしばしば、作品において固有名を使用することを推奨する (MP §. 19, 89, cf. §. 90; AE §. 756, 798)。
- 16) §. 402では、狭義の知性が「判明に認識する能力」と定義される。
- 17) 訳注 11) を参照せよ。
- 18) 下位認識能力論において、sibi repraesentare という表現が用いられるのはこの箇所のみである。続く合理的心理学 (§. 751, 752, 765)、自然神学 (§. 867, 869, 872) で用例が確認される。注 4 参照。
- 19) ここでは、直前の「主体 (subiectum)」と同義と考える。
- 20) この定義文は、或る知覚が (他のものから最小限の仕方で区別され、知覚として成り立つためだけに十分であるとされる) 最も小さな徴標をもつ場合を表している。
- 21) この定義文では、或る表象が少しでも明瞭な表象となる寸前の限界に位置する「不明」な表象である場合には、当の表象に属している諸徴標

が（表象を明瞭や判明へと導くために必要な最低限の）区別のための指標となっていない、ということを表している。

- 22) 『美学』では、生動的明白性は「感性的 (sensitiva) 明白性」とも呼ばれる (AE §. 618)。
- 23) 以下では、知覚と知覚のもつ力として六種類が挙げられる。この分類の基礎となっているのが、バウムガルテンが優れた認識の要素として挙げる六性質、すなわち豊かさ (ubertas)、偉大 (magnitudo)、真理 (veritas)、明瞭性 (claritas)、確実性 (certitudo)、生命 (vita) である (MT §. 662, cf. §. 515; AE §. 22)。本項ではこの六性質のうち、真理にかかわる知覚とその力が一種、明瞭性にかかわる知覚とその力が三種、確実性にかかわる知覚とその力が二種挙げられる。第一に、他の知覚の真理を認識する根拠となる知覚は、「立証する力 (vis probans)」をもつ。第二に、他の知覚を明瞭にする根拠となる知覚は、「説明する力 (vis explicans)」をもつ。明瞭性の下位分類として判明性と渾然性があり、本項で提示されるように、渾然とした認識がもちうる外延的明瞭性は生動性と呼ばれる。よって、説明する力の下位分類として、他の知覚を判明にする根拠となる知覚は「解明する力 (vis resolvens)」をもち、生動的にする根拠となる知覚は「描き出す力 (vis illustrans)」をもつとされる。第三に、バウムガルテンは真理について明確に知ること (conscientia veritatis) を確実性と呼び (MT §. 515)、さらにそれが判明か非判明であるかによって確信と得心とに分ける (AE §. 832)。よって、他の知覚を確実にする根拠となる知覚は、判明性をもつ「確信する力 (vis convincens)」か、あるいは非判明性をもつ「得心させる力 (vis persuasoria)」をもつとされる。
- 24) §. 93 では、「客観的確実性」が「存在者において真理が統覚されうること (apperceptibilitas)」と定義される。
- 25) 原語は gratiae (優美の女神) である。